

臨床検査技師の手洗いに関する意識調査と細菌学的検討

杉田 華菜, 田中 伴康 (日本医療学院専門学校), 小泉 章, 佐野 麗子
増谷 喬之, 岡本 康幸 (奈良県立医科大学附属病院)

【はじめに】臨床検査技師は、日常業務から手洗いおよび手指消毒の重要性を認識し、以下に示す3点について厳守する必要がある。検体からの感染自己防衛、感染源を検査室外へ持ち運ばない、生体検査において患者様に感染させない。しかし、実際の医療現場で患者様に接する機会が少ないことや、院内感染対策について学習機会が少ない点で、医師や看護師と比較して、手洗い(手指消毒)に対する認識や院内感染防止に対する共通意識が希薄である可能性が考えられる。そこで、臨床検査技師の日常の手洗いに関するアンケート調査と蛍光塗料を用いた手洗いの模擬実験を行い、各技師の手洗いに対する意識とその実態及びハ⁺-ムスタング[®]による手掌の保菌状態の検討を実施した結果、若干の知見を得たので報告する。

【対象および方法】

1.手指消毒に関するアンケート調査

奈良医大附属病院に勤務する臨床検査技師60名を対象に手洗いに関する具体的な実践状況についてアンケート調査を行った。

2.手指洗浄効果判定

蛍光塗料を用いたグリッターパグ[®]を使用し同病院に勤務する検査技師60名の中から16名を選択し検討を行った。

3.手洗い前後の手指保菌状況についての細菌学的検討
対象は検査部採血室に勤務する技師4名、看護師1名および生理機能に勤務する技師5名の計10名で消毒薬不活化剤が添加されたハ⁺-ムスタング[®](手掌型SODF寒天培地)を使用し検討を行った。

【結果・考察】手洗いに対するアンケート調査結果は個人差が見られ、実施状況についても同様であった。ハ⁺-ムスタング[®]を用いた検討で被験者全員に業務前より業務後において菌量の増加が見られた。手洗い後、布タオルを使用していた人は、ハ⁺-ハ⁻パグ[®]を使用した人と比べ菌量が多く有意差が認められた。以上の結果から、院内感染防止の基本である手洗いを効果的に行うためには、手洗いに関する技師全体の共通の知識や理解を得る必要があると考えられた。

連絡先：0744-22-3051 内線3243